



# 目次

|      |   |
|------|---|
| はじめに | 1 |
| 第一章  | 2 |
| 第二章  | 4 |

# はじめに

『ごん狐』は、一九三二（昭和七）年に新美南吉<sup>にいみなきち</sup>が『赤い鳥』で発表した童話。

文中のルビ、傍線、圈点、註はPDF生成の例として付与した。

# 第一章 一

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城があつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。<sup>(1)</sup>その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」<sup>ぎつね</sup>という狐がいました。ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの**一ぱい**しげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、**菜種**<sup>なたね</sup>がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとって、いたり、いろいろなことをしました。或秋<sup>ある</sup>のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。雨があがると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていて、百舌鳥の声がきんきん、ひびいていました。ごんは、村の小川の堤まで出て来ました。あたりの、すすきの穂

には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どつとまshいていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにぐった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついていました。しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちゃごちゃはいつていましたが、でもところどころ、白いものがき

(1) 江戸時代から明治時代と推定されているようです。

らきら光っています。それは、ふとうなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼって、水の中へ入れました。<sup>②</sup>兵十はそれから、びくをもつて川から上りびくを土手において、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぼんぼんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首へまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくりしてとび

あがりました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれませんでした。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しよけんめいに、にげていきました。ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして穴のそとの、草の葉の上にのせておきました。

## 第二章 二

十日ほどたつて、ごんが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかりますと、そのの、いちじくの木のかげで、弥助の家内が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。「何だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」　こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰に手拭をさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えています。「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。「兵十の家のだれが死んだんだろう」　お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦が光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさき

つづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴つて来ました。葬式の出る合図です。やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へはいって来ました。人々が通つたあとには、ひがん花が、ふみおられていました。ごんはのびあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。いつもは、赤いさつま芋みたいな元氣のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。「ははん、死んだのは兵十のおつ母だ」　ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。その晩、ごんは、穴の中で考えました。「兵十のおつ母は、床についていて、うなぎが食べたいと言つたにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとつて来てしまつた。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおつ母は、死んじやつたにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだら

う。ちよッ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」





